

人間的自然・本性の神化とその成立根拠

——十字架と復活の働きを愛智として問う——

谷 隆一郎

序論

ロゴス・キリストの名、そして十字架と復活という事態は、西欧近・現代の大方の学的枠組みにあつては、特殊なキリスト教教理に属するものと看做されよう。しかし以下においては、教父の伝統に忠実に、それらの事柄をしも、愛智（＝哲学）の中心的位相に関わることとしていささか吟味し探究してゆきたい。ちなみに、一般に教父たちにとつては、神学（*theologia*、知られざる神をふさわしく称えること）と哲学（*philosophia*、愛智の営み）とは、基本的に軌を一にする探究であつた。

ところで、人生も早いものでわたしもいわば人生の黄昏の時期にあり、もはや「キリストの名」を避けてはおれないという気持である。そこで改めて、キリストの姿を少しく正面から見つめて中心的問題を問い進めてゆきたいと思う。ただその際、聖書や教父たちの驚くべき言葉を単に外側から言挙げするだけではなく、むしろそれらが初めて語り出された当の原初的・使徒的経験にできるだけ遡つて、われわれ自身の内側から新たに見出してゆくことが必要であらう。

さて、神化（*theosis*）とは証聖者マクシモスによれ

ば、「われわれにとって最も愛されるべきもの」であり、いわば人生の究極の目的であった（『難問集—東方教父の伝統の精華』、谷隆一郎訳、知泉書館、二〇一五年、P G 九一、一〇八八C）。もとよりそれは、人間が端的に神になつてしまふなどということではなく、人間の自然・本性（*physis*）が開花し成就してゆく道そのものであった。というのは、人間本性および人間の形相（*eidos*）はどこまでも無限性（つまり神）に開かれた動的構造のうちにあるからである。

また他方、神化とは、神的生命ないし神的存在に改めて「より善く参与してゆくこと」である。しかしそのことは、むしろ必然的には生じえず、われわれの自由・意志（*proairesis*）の働きの必要とする。そしてそこには、神的働き（エネルギー）と人間的働きの不思議な協働（*synergia*）が存するであろう。

それはともあれ、神化などという究極の姿の成立を問ひ抜くためには、まずはその発動ないし端緒が注目されるべきであろう。端緒（*arxē*）が現出してきたとき、そこには終極・目的（*telos*）もまた何らか現前しているからである（ちなみに、これは古来の教父の伝統にあつて、「信・信仰の端

緒」として問題にされてきたことでもある。）

この点、たとえばニュッサのグレゴリオスは、旧約聖書『雅歌』の花嫁が花婿の「愛の矢」に貫かれて「愛の傷手」を受け、己れ自身を超えゆく脱目的愛に促されたことを、「愛智の発動」として語っている（『雅歌講話』第四講話など）。それはグレゴリオスの言うエペクタシス（つまり自己超越）の姿であるが、グレゴリオスはそこに人間的自然・本性の完成してゆく「動的かたち」を見ていた。そうした根源的な動き（*κίνησις*）は、固定し完結した形相ではなく、限りなく自己を超出してゆく「絶えざる生成」であるという。したがって、そこにはいわば「存在論的ダイナミズム」が漲っているのである。

同様にまたアウグスティヌスは、よく知られた箇所だが、『告白』第十巻で記憶論を展開するに先立って、次のような印象深い言葉を発している。「主よ、わたしはあなたを疑いをもつてではなく、確かな知（良心）（*conscientia*）をもつて愛する。あなたはわたしの心（*cor*）をあなたの言葉をもつて刺し貫いたので、わたしはあなたを愛してしまった」（十卷六章九節）。この文中、「あなたの言葉（*verbum*）」とあるのは単数形で記されており、前後の文脈

からして明らかに「ロゴス・キリスト」を意味しよう。こうした「愛の発動」から始まるアウグスティヌスの記憶論は、ついには「神の記憶」にまで至る。従つてその論の全体は、無限なるものに開かれた大きな円環構造を成しているのだ。そして、アウグスティヌスは記憶論の最後に、有限なる自己の嘆きと試練を語り、さらには「神の憐れみ」を請い願っている。

以上のことは、いわば呼び水としての小さな序論である。次に本論に入るが、まずは、神化の道行き端緒を如実に示しているものとして、パウロの「キリストとの出会い」の言葉を取り上げたいと思う。

一 「わたしのうちでキリストが生きている」(ガラテア二・二〇)

——キリストとの出会いと意志的聴従——

パウロはキリストとの霊的な出会いを、こうした鮮烈な言葉で語っている。それはまさに、「新しい生の誕生・生成」を告げるものであった。そのときパウロにあって、

「わたし・自己」の閉ざされた姿(いわば頑なな自我の啓は崩され突破されているのだ。(それはある意味で、道元『正法眼蔵』の言う「身心脱落」の姿でもあろう。)

ともあれその際、場ないし器となつた人間の自然・本性のうちにキリストの働き(エネルギー)ないし霊(ブネウマ)が注ぎ込まれ、宿り来つたと見えよう。そこで注意すべきは、パウロにおける「生の根底的変容」と「キリストの霊の宿り」とがほとんど同時的でかつ同一の事態だということである。このことは、後に「キリストの復活についての使徒的経験」を吟味してゆくと、探究の基本線ともなる。あらかじめ言えは、ここでは「父なる神への聴従の範型」として「キリスト自身の信・信仰(faith)」が、そして「信そのものたるキリストの到来」(ガラテア三・二五)ということが問題の根本に見出されてくるであろう。

さて証聖者マクシモスは、「わたしのうちでキリストが生きている」というパウロの言葉について次のように洞察している。

これは恐らく、神的な使徒パウロの言うごとく、子

が父に従うような聴従のことである。そうした聴従によって、あるいはそれを通して、「最後の敵たる死が滅ぼされるのだ」(二テモテ一・一〇)。……実際、われわれの救い主自身、自ら父への聴従をわれわれの範型として示して、次のように言っている。「もはやわたしの意志するようにではなく、あなたの意志するように

に為したまえ」(マタイ二六・三九)と。また神的なパウロは、主に倣って己れ自身を否定しつつ、もはや固有の生命を持っているとは思わないかのように、「もはやわたしが生きているのではなくて、わたしのうちでキリストが生きている」(ガラテア二・二〇)と言う。

しかし、こう言われたからとて、あなたたちは心騒がせてはならない。なぜならば、わたしはその際、自由の廃棄が起こると語っているのではなくて、むしろ自然・本性に即した確かで揺るぎない姿、あるいは意志的(グノーメ的)聴従(*agapotic*)を語っているからである。それによってわれわれは、「在ること」を確固として保持し、似像が原型へと回復するように現に動かされることを欲するであろう。(「難問集」、

一〇七六A—B)

これは「キリストとの出会い(カイロス)」を語る言葉であるが、そこには「神化(神的生命への与り)の道行き」の発動・端緒が窺われよう。そこでとくに、「意志的聴従」という一見単純なことの成立の機微が、改めて問い披かれなければならないのである。

パウロは「わたしのうちでキリストが生きている」と語りえたが、それ以前の惨めな姿について、次のような嘆きの言葉を発している。「わたしは自分の意志する善はこれを為さず、意志しない悪を為している。……あゝ、この死の体から一体誰がわたしを救い出してくれようか」(ローマ七・一九)と。

このようにパウロは、自らのうちなる「意志の分裂」を赤裸々に告白している。その由々しい姿から「意志的聴従」の姿への変容が、まさに問題の中心にあるのだ。が、後の探究に備えて、人間的意志に関する基本的な言葉・概念のつながり(意味連関)を、便宜上わずかながら押えておこう。

意志の分裂がさらには「神への意志的背反」として現出するとき、それが「罪」(*amartia*)の根本であり、意志す

る者にとつて「死」(非存在への落下)ともなる。とすれば、神への意志的背反、罪、そして死という三者は、すべて通底していることになる。それは人間の自由の逆説的な姿であつて、人間の創造と表裏一体なのである。

ちなみに、「悪しく意志すること」から具体的な「悪しき行為」、「罪のわざ・行為」が現に生じてくる。しかし、諸々の悪しき行為の原因として突きとめられる「悪しく意志すること」それ自身は、もはやその原因を問い求めることはできず、いわば無底である。これは「自由の深淵」とも言うべき事態なのだ。(こうした「悪の原因」の探究については、とくにアウグスティヌスの『神の国』第二巻に詳しく論じられている。)

ところで、人は自分の力だけでは自らの「意志の分裂」や「神への意志的背反」を否定し克服することができない。それゆえパウロは、こう叫んでいる。「神なるイエス・キリストの恵み(Grace)によらなければ、この死の体から救われまいであろう」(ローマ七・二五)と。実際、「弱さにおいてこそ神の恵みがあらわになる」(二コリント一・九)という。してみれば、弱さと罪との自覚が高じたときにこそ、神の恵み、神の霊が人間の身に現に生成し

てくるであろう。

ただし証聖者マクシモスによれば、神の恵み(霊)は、単に天下一的に現出してくるのではない。超越的なものがこの有限で可変的な世界に生成・顕現してくるためには、一つの媒介として「自由・意志による応答」を必要とする。つまり、「実体・本質(ウーシア)のロゴス(意味)」と「生成(ゲネシス)の方式」とが峻別されているのだ。前者は無時間的に、いわば神的ロゴスのうちに定められているであろうが、後者は自由・意志の働きに依存している。従つて、その際にはもはや、無時間的な形相(エイドス)の結合ということが中心的な論点とはならない。(このことには、教父の伝統と古代ギリシア哲学との小さからぬ異なりが存しよう。)

そこで問題の要となるのは、神的な恵みないし霊は、その超越的働きに対する「聴従の類比(アナログア)」に従つて「この身、この可変的世界に生成してくる」ということである。それはまた、「信・信仰(ピステイス)の測りに従つて」とも言われている。かくして、「わたしのうちでキリストが生きている」ということは、キリストの働き(エネルゲイア)に対する意志的聴従の度合にに応じて、人間の身

に生成してくるようになる。

それゆえ、神的な恵み（恩恵）をいたずらに絶対化して、いわば祭り上げてはならない。というのもそのときに、無時間的な神的恵みばかりが強調されて、人間の自由の方は積極的役割のない「奴隸的なもの」になるからである。つまり、くだんの「生成の方式」がないがしろにされるなら、恵みというものがこの身に生成するための実在的根拠が問題化することなく、隠されたままになるであろう。

それはともあれ、当初からの問題に立ち帰って言えば、神への「意志的聴従」は、神に背反する意志を否定することによってはじめて現に成立しうるであろう。そこに存する「否定の契機」は、パウロならパウロにあつて根本では、「キリストの十字架」の働きに与ることによって現実のものとなると思われる。ただ、そのことを考察するに先立つて、まずは「キリストの復活」という事態の使徒的経験を、次に少しく吟味しておこう。なぜなら、原初的にはキリストの復活についての経験あつてはじめて、「キリストの十字架」の意味（神秘）も照らし出されてくるからである。

二 生の根本的変容とそこに現前するキリストの働き

(一) 「キリストの復活」の使徒的経験

パウロが「わたしのうちでキリストが生きている」と語ったとき、それは、復活したキリストとの出会い（カイロス）によってキリストの働き（のちに言及する神人的エネルギー）を経験してのことであつた。以下、そうした使徒的経験の内実を、いわば愛智（＝哲学）の問題として問うてゆきたい。

「もしキリストが復活しなかつたならば、わたしたちの宣教は空しく、あなたたちの信仰も空しい」（一コリント一五・一四）。周知のごとく、パウロはこう喝破している。その際パウロは、初期の使徒たちからの伝承として、また自らも確信したこととして「キリストの復活」を宣べ伝えている。しかし、キリストの復活とは、いわゆる客体的事実のようなものではなかつた。そしてそもそも、客観性、実証性などということは、とくに主体・自己の根底を揺がすような事柄に関しては、仮初の基準でしかないのだ。では、一体いかなる経験にもとづいて、イエス・キリストの

復活などという未曾有のことが確信され、それとして証言されえたのか。

ここにとりわけ注目されるのは、復活のキリストとの出会いによって使徒たちの生と存在様式に根底的変容が生じたということである。そしてそのことを可能ならしめたものとして、キリストの働かないし霊が現前していたであろう。従って、「使徒たちにおける生の根底的変容」と「キリストの復活の証言」とは、密接に結びついているのである。

そこで原初的経験に照らして言えば、復活のキリストとの出会いの内実とは恐らく、死をも否定し凌駕するような「真の生命の働き（エネルギー）」が現前したということであろう。そのとき彼らには、己れの生命と人生そのものをすべて捧げゆくほどの「生の根底的変容」が生じた。それはまさに、「新しい人の誕生・生成」であったと言える（二コリント五・一七、エフェソ四・二四など）。この点、福音書は確かに「イエス・キリストの言葉と生」を伝えているが、そのことは同時に、使徒たちにおける「新しい人の成立」に支えられていた。すなわち、「使徒たちの真実」が「キリストの真実」を証示しているのだ。「わたしは在

る、在らんとする」(αληθ. ἔσθ. εἶναι) (出エジプト三・一四)たる神の(そしてつまりロゴス・キリストの)顕現の機微がそこに潜んでいる。

とすれば、そのことには多分に循環した再帰的な構造が認められよう。つまり、(i)、使徒たちにおける「生の根底的変容」は、そこに現前し働いているものとして「死をも超えゆく真の生命の働き」を証示している。また他方、(ii)、そうした「キリストの真の生命の働き」は、使徒たちの「生の根底的変容」を成立させた根拠である。そしてこのことは、「ロゴス・キリスト」についての教理や「神人的エネルギー」が語り出された理由であり、その原初的な場でもあった。

これについては、次に要点のみ確認しておく。(i)、もしキリストの働きの神学的エネルギーでなければ、人間的な「意志の分裂」や罪を克服して、「生の根底的変容」をもたらすものとしては働きえなかつたであろう。しかし、(ii)、もしキリストの働きの人間的エネルギーでもなければ、人間本性に適合して働いてその変容をもたらすこともなかつたであろう。これら二つのことからして、キリストの働きの神学的かつ人間的なもの、つまり神人的エネルギー

イア (ἡ θεωμαντική εὐπρέπεια) であることになる。

かくして、使徒たち(つまり生身の人間)における「神人的エネルギーの確かな経験」から、神人的エネルギーの発出する主体(源泉)たる「神人性存在(受肉したロゴス・キリスト)」が遙かに証示される。すなわち教理的定式として、イエス・キリストは「神性と人性とのヒュポスタシスの結合」等々と語られるのだ。しかしもとより、キリストの実体・本質(ウーシア)はどこまでも知られえず、ただその働き(エネルギー)が経験され、何ほどか知られるに過ぎない。

この点たとえば「カルケドン信条」の中で、神性と人性という二つの自然・本性がそれぞれの固有性を保持しつつ、「融合せず、変化せず、分割せず、分離せず」という風に、徹底して否定的に語られているゆえんである。そうした四つの否定辞によって、キリストのウーシアに関して人は最後まで不知に留まることが暗示されている。しかしその根底には、ロゴス・キリストのエネルギー・プネウマに出会った人の確かな経験が存するのだ。それゆえわれわれは、一見無味乾燥な教理表現の背後に、神の働きと霊に、そし

て神人的エネルギーに出会って「愛の傷手」を受け、脱自的愛に促された人々の切実な経験があることを、忘れてはならないであろう。

そこで、神人的エネルギーについての代表的表現を一つ挙げれば、証聖者マクシモスは集約的な表現で次のように語っている。

神人的エネルギーを自らのためではなくわれわれのために為した方は、自然・本性を超えた諸々の働きによって自然・本性を新たにした。そうしたわざは、自然・本性の法に即して導入された生(ἄλλο)である。主は自然・本性として二様であり、神的な法と人間的な法とによって混合なく結合された生を同一のものとして担いつつ、それを適切な仕方であらわにした。すなわちその新しい生とは、単に地上のものとは無縁で逆説的なものではなく……新しく生きる人の新たなエネルギーをしるしつけているものなのだ。この神秘に対してふさわしい名称を考え出した人は、それを神人的と呼んだ。それは、「神性と人性との」語りえざる結合・一性に対応する交わりの方式を示すためである。

〔難問集〕、一〇五七C—D)

これはいわば、「範型としてのキリストの生」を語る言葉である。それはまた、「ロゴスの受肉」が同時に「人間本性の神化」でもあるような、「受肉⇌神化」なる存在の現出を指し示している。しかるに、そうした受肉存在は既述のごとく、「使徒たちにおけるキリストの神人的エネルギーの経験」から、はじめて語り出され証示されたと考えられよう。

ここに「範型としてのキリストの生」とは、「父なる神への全き聴従」という「キリスト自身の信・信仰（ピステイス）の姿」でもあらう。そして、そのような「範型としてのキリストの信」に、人が改めて聴従してゆくことが、神化の道行きの基本となるのだ。ただ、その成立に不可欠のものとして介在している「否定の契機」については、後に「キリストの十字架」を取り上げる際に考察することにした。

（二）タボル山での「主の変容」

このことは、古来とくに東方キリスト教の伝統にあって、

重要な意味を有するものとして解釈されてきた。あらかじめ言えば、主の変容にまみえた使徒たちの経験は、その内実としては「キリストの復活の経験」とほとんど同じ構造を有しているのである。周知のように、聖書にはこう記されている。

「イエスはペトロとヤコブとその兄弟ヨハネを連れて、自ら高い山に登った。イエスは彼らの前を変容し、その顔は太陽のように輝き、衣服は光のように白くなった。」（マタイ一七・一—二）

この一文について証聖者マクシモスは、次のように極めて象徴的に解釈している。

キリストの弟子たちのうちである人々は、アレテー（善きかたち、徳）の熱心さによってキリストとともに上昇し、キリストの顕現の山に引き上げられた。そこにおいて彼らは、変容したキリストにまみえたのである。（〔難問集〕、一一二五D）

こうした言葉に窺われるように、「キリストが変容（*transfiguration*）の山に登ること」は、それにまみえた使徒

たちにおける「アレテー（善きかたち）の形成」と密接に対応している。すなわち、「主の変容」は、単に客体的事実として記述されているのではない。むしろ、「キリストの変容」、つまり神性と結合した「畏れ多い姿」は、そのエネルギーによって「使徒たちの上昇ないし変容」をもたらしたのである。マクシモスは先の文に続いて、驚くべきことを語っている。

彼らは肉による生を終える前に、霊（ pneuma ）が彼らのうちに働かせた「感覚的働きの変化」によって、肉から霊へと移った。つまり、諸々の情念（パトス）の敵いを彼らのうちの知的な力によって引き上げた。そのとき彼らは、霊によって魂と身体との感覚的なものが浄められ、自らに示された神秘の霊的ロゴス（意味）を教えられたのである。（同、一二五D—一二二八A）

この文中、「感覚的働きの変化によって肉から霊へと移った」とあるのは、先に述べた「生の根底的変容」の内実を明らかにしていると思われる。さらに言及しておくな

ら、マクシモスにあつて、魂と身体、あるいは思惟的なものと感覚的なものとは、分離し独立した二つの存在領域に属するとは看做されていない。かえつてそれらは、アレテーの形成のうちにより善き仕方と結合され、全一的なかたちに包摂されてゆくべきものであつた。そして、そうした上昇ないし神化の道は、「諸々のアレテーの統合」としての愛（アガペー）の成立へと開かれていたのである（『難問集』、一二四八D—一二四九B）。それはさて置き、とりわけ注目すべきは、続いて語られた次の言葉である。

彼らは次のことを神秘的に学んだ。すなわち、キリストの顔の光り輝く至福の光線は……知性（ヌース）と感覚と実体と知とを超えた「キリストの神性」の象徴だということを。……彼らは、キリストが「肉（人間）」となつたロゴス」にほかならないことを知つた。つまり、キリストが人の子たちを超えた美（善）を有し、「はじめに在り、神とともに在り、神で在つた」（ヨハネ一・一）ことを学び知るのだ。そして彼らは、「万人にとつて（ウーシアとしては）全く捉えられぬもの」としてキリストを知るといふ「神学的な否定」に

よつて、恵みと真理とに満ちた「父の独り子」たる栄光（同、一・二八）に知的に上昇せしめられたのである。（『難問集』、一一二八A—B）

これによれば、「主の変容」にまみえた使徒的経験は、極めて高い段階にあることになる。このことに關してはまた、次のように洞察されている。

主は初心者たちにはしもべのかたちで現れ（フィリピ二・七）、かの変容の山に登る主に従う力のある人々には、世界の創造の前に存した神のかたちで現れる。それゆえ、主にまみえるすべての人々にとって、主は同一の姿で現れることはありえず、各々における信仰の測りに従つて別様に現れるのだ。（神学と受肉の撰理とについて、II・一三、『フィロカリア』Ⅲ所収、谷隆一郎訳、新世社、二〇〇六年）

してみれば、この身、この世界における「ロゴス・キリストの生成・顕現」には、ある種の階梯が存する。その「生成の方式」が、「信・信仰の測りないし類比に従つて」

といった言葉で指し示されている。そこに、「神的働きと人間的自由・意志の働きとの協働」という事態が秘められているのだ。しかしその点は指摘するだけに留め、ここでは次のことをとにかくも確認しておこう。

「キリストの復活」と「主の変容」とは、それらに出会つた使徒たちの経験の内実としては、ほとんど同じ構造を有している。つまり、いずれの場合にも、有限な身に「生の根底的変容」が確かなこととして経験されている。そうした経験は、その成立を可能にした「神性の働き」ないし「神人的エネルギー」へと無限に開かれている。その際、人間的自然・本性は、本来あるべき姿としては、神性の働きを受容し宿す場ないし器となるのだ。言い換えれば、人間の形相（エイドス）は、より上位のものたる神的エネルギーに対しては、いわば身体ないし質料となるのである。それは広義の「身体性の問題」であるが、一般に古代ギリシア哲学に対して、いわば「身体・質料の復権」という性格を有する。

ところで、くだんの「生の根底的変容」ということは、その成立の不可欠の媒介として「自己否定の契機」が

潜んでいた。すなわち、先に述べた「意志的聴従」も「新しい人の誕生」も、あるいは「肉から霊への移りゆき」ということも、何ほどか己れ自身を否定し無化するかのような「否定の調べ」に貫かれている。そして、それは恐らく最も単純な一点に、つまり心碎かれた謙遜ということに帰着するであろう。それゆえ、そこに潜む内的な機微、意志の構造を少しくロゴス化するために、次節においては「キリストの十字架をめぐる証聖者マクシモスの卓抜な言葉を吟味してゆきたい。

三 キリストの十字架の普遍的意味

——信・信仰の範型たるキリスト——

キリストが十字架につけられたことは、確かに歴史的出来事であった。しかしその根本的意味（神秘）は、すでに触れたごとく、「キリストの復活」の使徒的経験からこそ、はじめて開示されたのだ。それはつまり、「死をも凌駕する真の生命の現存にまみえ、それを受容した経験」である。言い換えれば、「キリストの復活」は客体的出来事として捉えられるのではなく、かえって使徒たちの「生の根底的

変容」の内側から、それを可能にした超越的根拠たる「神人的エネルギー」の経験によって証示されるのである。

そのことは、「信・信仰の原初的成立」を指し示している。が、問題はその「信仰」の意味なのだ。信仰とはむしろ、「不合理なものを闇雲に抱えたもの」ではなく、また単に「天下りに与えられたもの」でもない。信・信仰とはまずは、謙遜な魂のうちに「神人的エネルギーを受容し宿したかたち」であろう。ただその成立には、いわばより先なる契機が秘められている。それは後に見るように、「キリスト自身の範型たる信」であり、「信仰そのものたるキリストの到来」（ガラテア三・二五）である。

十字架はまさに逆説的なるしである。なぜならば、十字架は死を意味するが、キリストが十字架につけられ、しかも死に打ち勝つ「真の生命のエネルギー」として人々に現前した限りで、「キリストの十字架」は「死からの復活」＝「神への背反たる罪（＝死）を否定し無化すること」のしるしとなったからである。

ところで、人間的自由・意志は、「悪しく意志する」という方向にも晒されている。それは、人間的意志の構造そのものに潜む「負の可能性」であろう。「すべての人は罪

のもとにある」(ローマ三・九)とされるゆえんである。そうした負の可能性は、各人のそれぞれの状況の中で、多かれ少なかれ現に「罪のわざ」として生起するからだ。しかし、そうであればこそ、「キリストの十字架」は、人間の自然・本性(人性)のうちに構造的に潜む罪(つまり神への意志的背反)をしも、否定し凌駕しうる実在的力ないし働きを証示していると考えられよう。

ただ、このことはむしろ、後から造り出された思想ないし觀念などではなく、使徒たちの身に現に生じた「生の根底的変容」の中から、「神人的エネルギーの現前」として、また「キリストの眞実」として証言されてきたのである。

さて、キリストは「父なる神への全き聴従と信」ということの範型として語られている。この点、証聖者マクシモスの以下のような一連の表現が注目されよう。

われわれの主イエス・キリストは固有の根拠(長)のしるし・象徴を受容し、自らの十字架を肩にかついで登場した。キリストはまず自らがそれを担い、次に

他の人々に与えるのだ。……最初に根拠を手には有する人が、それに従いゆく人々を導いて、その前をゆかねばならない。……肩とは実践のしるしであり、十字架とは死をもたらすものとして不受動心(*anastasia*)のしるしである。……人間のロゴスの自然・本性が、実践とそれに結びついた不受同心によって高められることによつて、キリスト自身が明らかに「ともに(十字架に)」つけられる(高く挙げられる)」(*synagorou*)と言われるのだ。それはまさに、諸々の人間における「キリストのかたちの形成」である。(『難問集』、二二八四A—二二八五A)

ひとり至高の存在は、霊において十字架につけられるわれわれを通して、ともに十字架につけられる。その際われわれは、実践とそれに伴う不受動心によつて知へと導かれ、非質料的な知性(ヌース)において、諸々の神的なものについての神秘的な観想と参入(*hupod*)へと高められるのである。(同、二二八五B)

これは不思議な言い方である。なぜなら、「人が実践と

不受動心（つまり自己否定）を通して高められること（十字架につけられること）」と「キリスト自身が十字架につけられること」とが、何らか通底し、しかも同時的なこととして捉えられているからだ。そこには恐らく、次のような機微が潜んでいる。われわれが「情念（パトス）からの解放」たる不受動心のわざを何ほどか為しえたとすれば、そのことの成立根拠として「ロゴス・キリストの十字架と復活」のエネルギーが現前し働いているであろう。それはいわば、「受肉と受難と復活」の全体を貫く神人的エネルギーだと思われる。

ところで受肉とは、「キリストの自己無化（ケノーシス）ないし自己否定」のわざであり（フィリピ二・七）、十字架も死と自己否定のしるしである。従って、それらは全体として二重の自己否定の働きだと言えよう。そして、そうした二重の自己否定の範型的エネルギーに聴従してゆくなら、その度合・類比に従って、当のエネルギーがわれわれのうち何らか注ぎ込まれてくるであろう。

もとよりわれわれは「神への意志的背反たる罪」を、人間的自由・意志の構造として抱えている。しかし、キリストのエネルギーに聴従し分け与ってゆくときには、われ

われの意志的背反という否定・落下の姿が何らか否定され、いわば二重否定的な仕方では、人間本性が改めて「より善きかたち」（アレテー）に多少とも甦り、再形成されてゆく。すなわち、「人間的・自然・本性の開花・成就」や「神化」の道行きは、ある意味で二重の自己否定を契機として現に生成してくるであろう。

証聖者マクシモスはまた、「霊において十字架につけられるわれわれを通して、キリストがともに十字架につけられる」と喝破していた。それゆえ、仮に一言で言うならば、「キリストの十字架」と「われわれの十字架」とは、「超越的な根拠（範型）」と「その具体的な生成・顕現」との不可思議な関わりとしてあると考えられよう。つまり（i）、われわれの十字架（自己否定のわざ）は、その成立根拠として「キリストの十字架とそれに続く復活」における「神人的エネルギーの現存」を証示している。なぜならわれわれは、「死にも打ち勝つ真の生命」に与ってはじめて、何ほどか自己否定のわざを為しうるからだ。他方（ii）、「キリストの十字架と復活のわざ」は、ある意味では「われわれの十字架のわざ」として、有限な世界と歴史に具体

化し、生成・顕現してくるのである。

その際、受肉と受難と復活という三つの契機は、いわば全体としてかつ同時的に、神人的エネルギーとして「つねに」働いているであろう。しかし、それが「あるとき」この時間的世界に現に生成・顕現してくるためには、人間の意志的働きを、そして歴史を必要とするのだ。とすれば、人間と歴史とは、神の、そして神的エネルギーの発現・生成のための器となり身体となろう。思うに証聖者マクシモスは、パウロ書簡やヨハネ福音書の言葉をまっすぐに受容し、「キリストの父への聴従と信そのもの」を凝視した。そして、そうした「キリストの到来」（ガラテア三・二五）のうちに、永遠的なものと時間的なものとの不思議な交流（ペリコーレシス）を洞察していたのである。

かくして、神的な働きと人間的自由の働き、さらには永遠と時間との驚くべき出会いと交流が、自らの生の変容のうちに経験されるとき、はじめて「その名に値する歴史性」が生起してくる。さらにはまた、神化の道行きにおける「身体ないし身体性」の根本の意味も、そこに見出されることになろう。

四 意志的聴従の成立の機微

——意志論の最前線——

自由・意志は改めて言えば、「より善き方にか、より悪しき方にか」の両方向に開かれている。それゆえそれは、往々にして「意志の分裂」や「神への意志的背反」の姿に陥ってしまう。そうした姿から「神への意志的聴従」への根本的変容は、われわれの自力のみによつては生じえず、神的働きの協働によつてはじめて成り立つという。それは、「人間的意志のうちなる神の働き・わざ」でもあらうが、現にパウロはこう言っている。「あなたたちのうちに働いて、御旨を為さんために、〔善きこと〕を」意志させかつ働いているのは、神なのである」（フィリピ二・一三）と。

してみれば、神性ないし善性の超越性ゆえに、その働きは——万物を存立させているとともに——、とくに人間的意志のうちに最も深く内在し、その自由な応答を促しているのだ。証聖者マクシモスはその点を敷衍して、次のように言っている。

神の霊（ pneuma ）はわれわれのうちで自由・意志を新たに形成しつつ、善の実現へと働かせる。……ただし神は、人間の意志的同意なしには人を動かさないのだ。（『タラシシオスに宛てて』、PG 90、二八一B）

このことには、一見するところでは、ある種の循環ないし再帰性が存する。つまり、神的エネルギー・ pneuma の受容がなければ、意志的聴従も成立しえない。が、他方、意志的聴従という「善きかたち」（アレテー）としてこそ、神的働きがすぐれて具体化（身体化）し生成してくると言えよう。

しかし、このように循環と見えることは、いわば仮初の姿であろう。なぜなら、くだんの意志的聴従の成立根拠を求めるとは、堂々めぐりや無限遡行などではありえないからである。従って、恐らくはすべてのことに先んじて、究極の根拠のごとく、「神的エネルギー・ pneuma の受肉した存在」が現前し働いていなければなるまい。

ここにおいてわれわれは、先に言及した「キリストの十字架」の普遍的な問題場面に突き返されてくる。それは

「自己」否定の範型としての十字架」であり、「父への全き聴従（信）」としてのキリスト」である。

そうした「信そのものたるキリストの到来」（ガラテア三・二五）との「出会いの驚き」が、パウロの言葉に漲っている。そこにあつて、こう言われている。「わたしは今、肉において生きているが、それは、わたしを愛し、わたしのために自らを渡した（神の子の信・信仰）による」（同、二・二〇）と。これは、くだんの「わたしのうちでキリストが生きている」という言に続く表現であつた。

一つの要として、「父なる神への聴従の範型」を語る証聖者マクシモスの文脈からすれば、右のようなパウロの言葉での〈 *nitug tou nion tou theou* 〉や、他の箇所での〈 *nitug tou Xporou* 〉の多くは、まずは「神の子、キリスト自身の信・信仰」との意味で、いわゆる「主格属格」と読むべきであろう。（キリストへのわれわれの信仰）は、その後のことである。）すなわち、そうしたパウロの表現は、われわれの「信の働き」に先んじることとして、「信そのもの（範型）たるキリスト」の到来と現前を指し示しているのだ。

言い換えればそれは、「十字架の死をも否定し凌駕する

眞実の生命のエネルギー」の、すべてに先んずる現前であり、それとの出会い（カイロス）であろう。そしてそれは、われわれのすべての意志と行為に先んじて、その善き成立の可能根拠として現前していると考えられる。つまり、単に神的超越的エネルギーの現存ということに留まらず、それが現に身体化し受肉して働いていなければなるまい。（ちなみに、エフェソ書、コロサイ書に、「受肉の現在」、「先在のキリスト」が語られているゆえんも、恐らくはそこに存する。）

してみれば、われわれがほんの僅かに「善く意志すること」、「善きわざを為すこと」の根底にも、「十字架という死（自己否定）を介して甦った、眞の生命のエネルギー」が、可能根拠として現存しているであろう。それはいわば、「受肉したロゴス・キリストの（十字架と復活の全体を貫く）神人的エネルギー」なのだ。そしてそれは、すべてのもの、すべてのことに先んじて超越的に現存しつつ、歴史上のその都度の今、われわれの「意志的聴従」というかたちで生成・顕現してくるのである。この意味でそこには、「受肉の受肉」とも言うべき事態が窺われよう。

結語に代えて

証聖者マクシモスは、『神秘への参入（奉神礼の奥義入門）』（Mystagogia）という含蓄ある著作の終りの方で、いみじくも次のように語っている。

「この小さき者の一人に為したことは、わたし（キリスト）に為したことだ」（マタイ二五・四〇）とあるが、善きわざを必要としている人とは神（の現れた姿）なのである。……そして善く為しうる人は、恵みと分有によって自らが神であることを証示している。なぜなら彼は、神の善きわざの働き（エネルギー）を受容しているからだ。……もし憐れみが必要としている貧しい人が神であるなら、それは、われわれのために貧しくなった神の降下（受肉）のゆえである。すなわち神は、それぞれの人の受苦（受難）（*πυθος*）を自らのうちで同苦という仕方で（*συμπυθος*）受容し、それぞれの人の受苦の類比（アナログア）に従って、つねに善性（神性）によって神秘的に受苦を蒙っている。

るのである。(PG九〇、一〇八四C—D)

この意味深長な表現には、先に述べたような「キリストの十字架」との微妙な相関的関わりが読み取れる。この小さき者(他者)に対して「善く意志し、善く為しうる人」は、神の善きわざの働きを受容しているという。そうした神のエネルギーとは、「われわれのために無化し」(フィリピ二・七) 受肉した神のエネルギーにはかならない。

それゆえ、われわれが隣人・他者に対して「善く意志し、善きわざを為しうる」根拠は、受肉した神の神人的エネルギーに与えることに存するであろう。その際、個別の善き行為を捉ふことにおいて、われわれは根拠たる善そのものに、あるいは「善の受肉した存在」におのずと応答していることになる。言い換えれば、他者とのわれわれの関わりは、つねにその都度、絶対他者たる神(キリスト)との関わりを映し出してくるのだ。

ところで、「神はそれぞれの人の受苦(十字架)を自らのうちで同苦という仕方を受容する」とあるが、われわれは自らの受苦がそのように神に担われてはじめて、何ほどか受苦に耐え、それを担ってゆくことができよう。そして

さらに、神の自己無化と受苦(受肉と十字架)を介した「復活の生命的エネルギー」は、恐らくは時と処とを超えてつねに働いているであろう。が、それは、われわれの受苦(十字架)の度合に従って、また「信・信仰の測り・類比に従って」、あるとき、その都度の今、生成し顕現してくるのだ。「つねに」と「あるとき」との、そして「すでに」と「未だ」とのそうした緊張は、有限な身体的存在者たる人間の宿命でもある。

ともあれ、簡明に言うなら、絶対他者たる神に対する、あるいはむしろ「受肉したロゴス・キリストのエネルギー・ pneuma」に対する謙遜な心の披きと祈りあつてこそ、およそ他者との真の交わりと愛も成り立つてくるであろう。そのようなとき有限な他者は、いわば絶対他者たる神を、そして神的エネルギー・ pneumaの現存を指し示す「しるし・象徴」として、また神からの「賜物」として現出してくるのである。

(九州大学名誉教授)

*本稿は、二〇一六年二月一七日に東大・駒場にて開かれ

た教父研究会での提題草稿を、若干手直ししたものである。司会の宮本久雄氏をはじめ、特定質問の労を取ってくださった田島照久、山本芳久、袴田玲のお三方に対して、また当日参加して耳を傾けてくださった同行の方々に対して、改めて心から感謝の意を表したい。